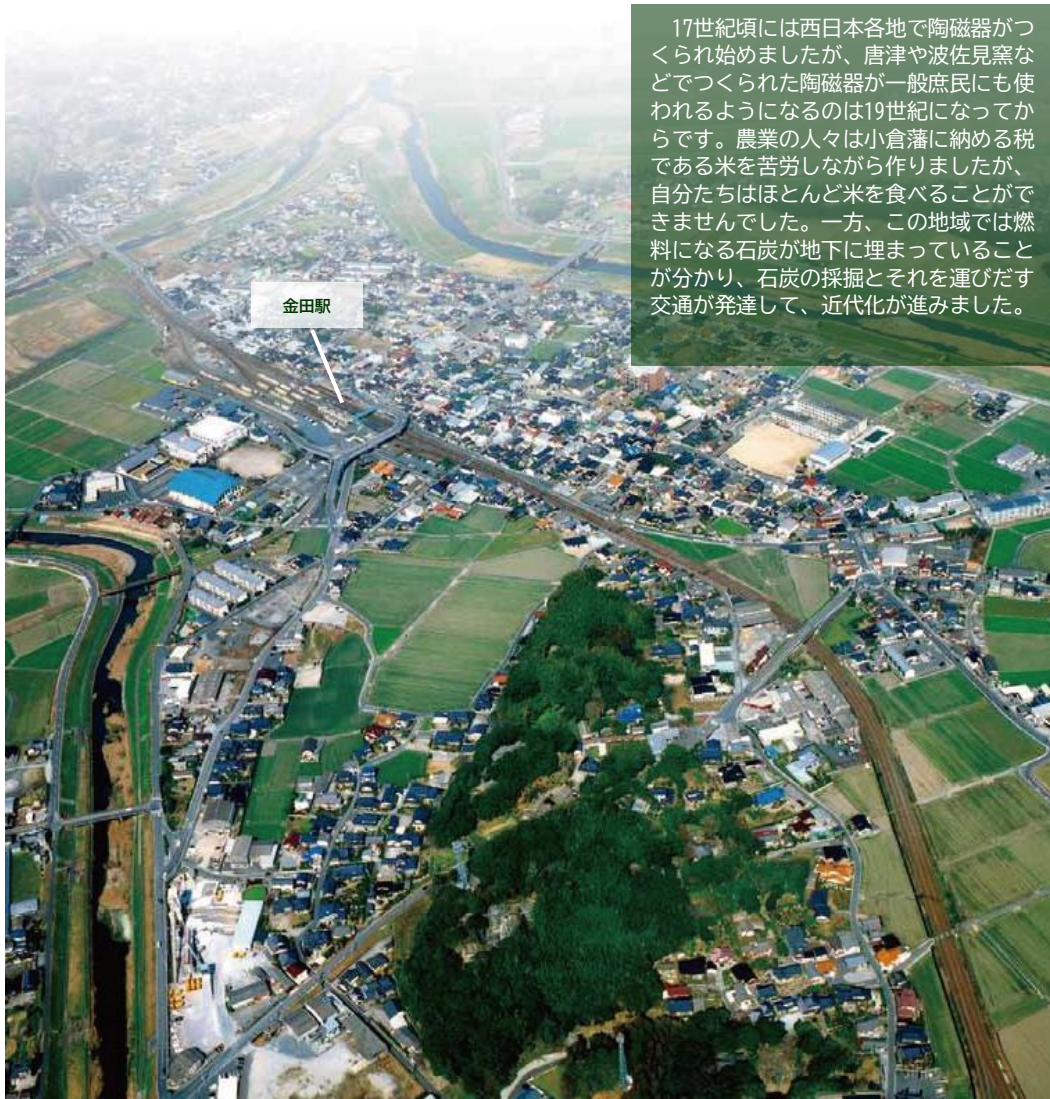


3 近世～近代のふくち

近世は上野焼の生産、近代は石炭の採掘が歴史の中心になります。

航空写真の中央やや左上に金田駅があり、駅の敷地が広いことがわかります。これは石炭産業が栄えていた時代、多くの貨物列車が行き交うため、広大な敷地を必要としたからです。

江戸時代の初めに、朝鮮半島からの渡来工人によって日本各地で陶磁器生産が盛んになり、福智町内の上野で始まったのが上野焼です。当時の大名たちの間で流行した茶を嗜む器として陶器の上野焼は重宝されましたが、明治時代になると衰退してしまいました。しかし、明治34年頃から、かつての窯元家系などの人々が努力して再興し現在のの上野焼となり、国の伝統的工芸品に選ばれています。



17世紀頃には西日本各地で陶磁器が作られ始めましたが、唐津や波佐見窯などでつくられた陶磁器が一般庶民にも使われるようになるのは19世紀になってからです。農業の人々は小倉藩に納める税である米を苦労しながら作りましたが、自分たちはほとんど米を食べることができませんでした。一方、この地域では燃料になる石炭が地下に埋まっていることが分かり、石炭の採掘とそれを運びだす交通が発達して、近代化が進みました。